



ショートコメント

★★★

Data 2022-106

監督：川村元気
 脚本：平瀬謙太郎／川村元気
 原作：川村元気『百花』（文春文庫刊）
 出演：菅田将暉／原田美枝子
 ／長澤まさみ／永瀬正敏／北村有起哉／岡山天音／河合優実／長塚圭史／坂谷由夏

百花

2022年／日本映画
 配給：東宝／104分

2022（令和4）年9月10日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

👁️👁️ みどころ

夏の終わりには花火がピッタリ。大阪では8月27日に「なにわ淀川花火大会」が盛大に開催されたが、本作に見る“半分の花火”とは一体ナニ？

本作の主人公は、認知症と宣告された母親・百合子と、妻の妊娠を告げられたばかりのその息子・泉。かつて母親が起こした、妻子ある男との駆け落ち事件の記憶は如何に？母親はそれを都合よく忘れることができても、息子はその記憶とどのように向き合うの？

邦画界で大活躍する川村元気が原作、脚本、監督した本作はいかにも製作委員会方式にピッタリだが、その是非は？そして、本作の出来は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆邦画界で“敏腕プロデューサー”として名を馳せている川村元気が、自らの体験を基に書いた小説『百花』が大ヒット！そうなれば、ネタ不足に悩む今の邦画界が、東宝を中心とする製作委員会方式でそれを活用しようとしたのは当然。その結果、川村元気が脚本を書き、監督にも初挑戦！

本作の主人公は、ある日突然認知症と診断された母親・百合子（原田美枝子）と、妻・香織（長澤まさみ）の妊娠が判明したばかりの、百合子の一人息子・泉（菅田将暉）。冒頭、シューマン作曲の有名な『トロイメライ』を弾く百合子の姿が登場する。ピアノ教室の先生をしているだけあって巧いものだが、アレレ、途中から音程がおかしくなり・・・？これは一体なぜ？認知症の進行につれて、母子の仲は次第におかしくなっていくことに・・・？

◆『羊たちの沈黙』（91年）での演技が印象的だった名優アンソニー・ホプキンスが83歳にして主演した『ファーザー』（20年）は、認知症をテーマにした父と娘の物語だった（『シネマ49』26頁）。本作はそれとは逆の、母と息子との物語だから、住んでいる家の所有権を巡る問題やどんな介護人をつけるか、等の問題は発生しない。また、そこでは、新しい恋人とパリに移るため「新しい介護人を」と主張する娘に対して、父親は「俺を見

捨てるのか」と怒っていたが、認知症になるのが母親ならそんな問題もなし。しかし、介護施設行きとなった母親の部屋を片付けている際に発見した手帳を開けてみると？

そういえば、泉は子供の頃母親から捨てられた記憶があった。そのため、泉は1年間、祖母の家で育てられたが、あれは一体何だったの。1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災も、泉にとっては母親が居なかった時の記憶だ。その手帳の中には一体何が書かれていたの？そこから明らかになってくる母親の女としての“ある秘密”とは・・・？

◆菅田将暉の芸達者ぶりは定評がある。他方、百合子役の原田美枝子も現在NHKの朝ドラ『ちむどんどん』で、レストラン「アッラ・フォンターナ」のオーナー役を堂々とこなしている。しかし、本作に見る原田美枝子は？9月の第1週が終わった今、9月10日には見事な中秋の名月を楽しむことができたが、8月末～9月初旬にかけては、全国各地で恒例の花火大会が開催されている。今年の8月27日に開催されたなにわ淀川花火大会も見事だったが、本作で盛んに百合子が見たいと言っている“半分の花火”とは一体ナニ？

認知症が急速に進み始めた百合子の現在の年齢は？それに対して、泉を捨て、浅葉洋平（永瀬正敏）と駆け落ちした時の百合子の年齢は何歳？本作は現在の泉と子供時代の泉、そして現在の百合子と泉を捨てた若き日の百合子の姿を交差させながら描いていく。そこで私が思ったのは、「願わくば若き日の原田美枝子がもう少し若く美人であってほしい」ということだが、それはともかく、本作ではこの2つの時代の対比をしっかりと。

◆認知症が進行していけばやがて“人間崩壊”となり、死んでしまう。したがって、ある意味でそれがわからない本人よりも、それをじっと見ている周囲の人の方が辛いかもしれない。『ファーザー』を観ていてもそう思ったが、それは本作でも同じだ。

本作では、“半分の花火”の他にも、百合子はなぜ「一輪差し」ばかり飾っているの？親子で一緒にビスケットを食べる時、何から食べるの？等についても、母親の記憶と息子の記憶が違っていることが印象的に演出される。まさか、百合子が幼い息子を捨てて、男の元に走ったことを忘れていないはずはないだろうが、子供心にぼんやりとそのことを理解していた泉は、今日までその記憶をどのように受け止めてきたの？認知症をテーマにした映画では、息子のことや恋人のことすら認識できなくなった2人が葛藤するシークエンスが必ず描かれる。それは『ファーザー』でも、『明日の記憶』（06年）（『シネマ10』172頁）でも『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマ9』137頁）でも同じだ。

本作では、ついに泉のことが識別できなくなり、子供のように駄々をこねる百合子に対して、泉が「なんで忘れたんだ、こちらは忘れられないんだよ！」と叫ぶシーンが、クライマックスとして登場する。そのように叫びたいのは当然だが、百合子が何度も見たいと言っていた“半分の花火”とは？それは本作ラストに意外に単純な形で判明するので、あなた自身の目でしっかりと。

2022（令和4）年9月15日記